

リレーエッセイ
標準化とナレッジ・マネジメント

2022年12月
日本ナレッジ・マネジメント学会 理事
ISO等標準化研究部会長 齋藤稔

標準化の対象が、モノからサービス，社会システム，環境などへと大きく広がってきている。ISO Surveyによると、ISOの認証数と認証サイト数はいわゆるコロナ禍でも増加している。一方ナレッジ・マネジメント（以降KM）の範囲は、組織（企業）から産業や市場へと拡大してきており、更には都市や地域，国家，地球希望への拡大が期待される。標準化に対するKMの寄与を展望してみたい。

標準化の動向（対象の拡大と認証数の増加）

標準化の対象が、モノからサービス，社会システム，環境などへと広がってきている。例えばサービス分野では、ロボットサービスの規格（JIS Y1001）、小口保冷配送サービスの規格（ISO 23412:2020）が既に発行されている。社会システム分野では、サイバーセキュリティの規格（ISO/SAE 21434:2021）、自動運転の規格（ISO 34502:2022）が既に発行されている。環境分野では、サステナブルファイナンスの規格（ISO 32210:2022）が既に発行済みで、海洋生分解性プラスチックの規格はISO審議中である。

ISO Surveyによると、いわゆるコロナ禍でもISOの認証は減っていない。現在の集計方法となった2018年以降のISOの認証数と認証サイト数を右のグラフに示す。



日本国内では、改正&名称変更された「産業標準化法」が 2019 年に施行され、標準化の対象に、データ、サービス、マネジメントが追加された。「JIS」の意味は「日本工業規格」から「日本産業規格」へと変わった。

ナレッジ・マネジメントの変化

ナレッジ・マネジメント（以降 KM）の範囲は、組織（企業）から産業や市場へと拡大してきており、更には都市や地域、国家、地球希望への拡大が期待される。

異質なモノ／コトとの出会いが新たな知の創造のきっかけとなることが少なくない。そのためには他社（者）と繋がるのが有効である。ある分野では競合関係にある組織（企業）が別分野や市場で提携したり、従来接点がなかった異分野の組織同士が都市や地域の課題解決のために協働したりしている。こういった環境の中で日々ナレッジは生まれ、成長している。

経営の目的や在り方の変化と共に、組織の効率化向上や競争力強化のための KM から「世のため人のため」の KM へと変化してきている。。

今後の展望（標準の組み合わせ利用と人間中心の KM）

「Annex SL（附属書 SL）」で、ISO マネジメントシステム規格は「構造、分野共通の要求事項及び用語・定義を共通化すること」が定められている。対象分野が増え、細分化されたようにも見えるが、むしろ複数の ISO マネジメントシステム規格／標準を組み合わせ利用し易くなってきているとも言える。その際に複数規格／標準の横串あるいはインターフェースとして利用できるのが KM であろう。

人的資本経営への関心が高まってきている。国内では、2021 年に改訂されたコーポレートガバナンス・コードに人的資本に関する記載が加わったほか、2022 年 8 月に「人的資本経営コンソーシアム」の設立総会が開催された。HRM の国際ガイダンスである ISO 30414 は、2018 年に発行されている。

KM の ISO マネジメントシステムである ISO 30401:2018 は、ISO 30414:2018 と同じ、ISO TC260 で審議・発行されている。このことも活かし、人間中心の KM で標準の組み合わせ利用を促進したい。

日本ナレッジ・マネジメント学会のISO等標準化研究部会は、ISO30401:2018 及び同AMENDMENT 1 の英和対訳版の発行に貢献した。関係機関との協力関係を維持しながら、今後も活動を続けていく所存である。

リレーエッセイのバトンは、当学会広報/メルマガ編集担当の清水理事に渡します。

以上